童話：森の仲間たち

T-99

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

童話：森の仲間たち

【Ｎコード】

Ｎ９９４４Ｔ

【作者名】

Ｔ－９９

【あらすじ】

森の動物たちのおはなし。

水色絵具

くまのトニーとたぬきのチッチは、何をするのもどこに行くのもいつも一緒です。

今日は、森の仲間みんなと湖に絵をかきに行きました。

２匹は大きな切り株に並んで腰掛け、絵をかき始めました。

チッチはトニーに対してひとつだけいやなところがありました。

のんびり屋のくまのトニーは、鉛筆を借りてもすぐに返しません。

消しゴムを借りたらどこかになくしてしまいます。

なかなか返さないトニーに、チッチはものを貸すのがいやになりました。

「ねえチッチ、水色絵具を貸して、水色絵具がみつからない」

「ごめんトニー、いまから空をぬるから水色絵具は貸せないよ」

チッチはうそをつきました。

トニーに貸したら水色絵具がなくなると思ったのです。

うさぎのミミもトラのポルルもきつねのヤンも水色絵具を貸しません。

トニーに貸したら絵具が返ってこないとみんな知っていたのです。

がっかりしたトニーを見ても、チッチはトニーがかわいそうだとは思いません。

借りたものをきちんと返さないトニーが悪いとチッチは思いました。

しばらくして、チッチは緑色絵具が残り少ないことに気がつきました。

このままでは大好きな木々の緑をぬることができそうもありません。

「チッチ、緑色絵具がないの？　これ貸してあげるよ」

トニーは絵具をチッチに差し出しました。

トニーの緑色絵具はもう少ししか残っていません。

チッチが使うと絵具はなくなりそうです。

「ありがとうトニー。でもボクが絵具を使うとトニーの絵具は全部なくなるよ」

するとトニーは言いました。

「緑色絵具はチッチにあげる」

その言葉を聞いたチッチは少し考えてこう言いました。

「トニーありがとう。これ使って」

チッチは水色絵具をトニーに手渡しました。

トニーはうれしそうに水色絵具を見つめています。

2匹はお互いの絵具を交換し、絵をぬりはじめました。

トニーは空をぬり、チッチは葉っぱ一枚一枚を丁寧にぬりました。

その様子を見ていた森の仲間たちはみんなでトニーのところに行きます。

「ごめんよ、トニー」

「どうしてみんなあやまるの？」

のんきなトニーの言葉にチッチが笑い出しました。

つられてミミとポルルとヤンが笑います。

いつしか森の仲間みんなが笑い出しました。

笑い声の中で、トニーだけが不思議そうに首をかしげています。

森の仲間はみんな仲良しです。

のんびり屋のくまのトニーはあいかわらず借りたものを返しません。

チッチに借りたものもなかなか返してくれません。

それでもチッチはトニーに対していやなところがなくなりました。

トニーとチッチは仲良しです。

＞i２５９８６｜３３７８＜

みんなのねがい

森の仲間が住む山にとても大きな木がありました。
その木にどんなねがいも叶えてくれる不思議な実がなりました。
今日は、森の仲間みんなでねがいを叶えに行きます。
トラのポルルはうれしそうにいいました。
「みんなはどんなねがいを叶えてもらう？」
「ぼくは空を飛びたいな」
青い空をながめながら、たぬきのチッチはいいました。
「わたしはきれいな服をたくさん着たい」
うさぎのミミは跳びはねながらいいました。
「おいらはホットケーキを腹いっぱい食べるぞ」
食いしんぼうのきつねのヤンは、しっぽをふりながらこたえます。
願いごとをいいあいながら歩いていくと、すぐに目的の木にたどり着くこができました。
木は立派な幹に支えられ、枝はどこまでも、どこまでも、広がっています。

木を見上げると、一番てっぺんの枝に一つだけ金色の実がなっているのが見えました。

どうやらあれがねがいを叶えてくれる実のようです。

早速、くまのトニーが大きな木をゆすってみました。

しかし、実は落ちてきません。

今度は森の仲間みんなで木をゆすってみます。

土の奥深くまでしっかりと根をはやした木はびくともしません。

すると突然きつねのヤンがその木に登りはじめました。

ヤンはあっという間に金色の実にたどり着くと右手に実を持ちながらいいました。

「実を一番にとったから、ねがいごとはおいら一人のものだよ」

勝ち誇ったヤンの言葉に森の仲間たちはびっくりしました。

「ずるいぞヤン、降りてこい」

「ねがいごとはみんなで決めようよ」

仲間の声など聞こえないかのようにヤンは笑っています。

その時です、木の上でバランスを崩したヤンが逆さまに転げ落ちま

した。

ものすごい勢いで転げ落ちたヤンは、全身いたるところ傷だらけです。

仲間が心配でかけよる前に、ヤンはあまりの痛さに気を失ってしまいました。

お月様がぽっかり空に浮かぶころヤンは目が覚めました。

ベッドのまわりには森の仲間たちが心配そうにヤンを見つめています。

「大丈夫かいヤン」

トニーの声にヤンは静かにいいました。

「うん、あんなに痛かったはずなのに今はどこも痛くない」

驚いているヤンにポルルうれしそうにいいました。

「みんなで実におねがいしたんだよ、ヤンの傷が治りますように」

ヤンが体を見ると、本当に傷は消えていてどこにもありません。

「みんなのねがいが叶ってよかったわ」

ミミはそう言いながらヤンの目の前にホットケーキをそっと置きま

した。

びっくりしてヤンはミミを見ました。

「みんなねがいが叶ったのに、ヤンだけ叶わないのは不公平でしょ？」

ミミの言葉に、みんなのねがいに、ヤンは胸がいっぱいになりました。

＞i25992—33378＜

遅れてきたプレゼント

トラのポルルは何でもすぐに信じます。
みんなが笑ってしまう嘘も信じてしまいます。
今回は、疑うことを知らないポルルの話です。

うさぎのミミは森の仲間みんなにいいました。
「明日はミミの誕生日、みんな遊びにきて」
ミミの呼びかけに、森の仲間はいいました。
「絶対行くよ」
きつねのヤンが真っ先にこたえました。
「プレゼントは何がいい」
たぬきのチッチがつづきます。
「素敵なプレゼントを持っていくよ」
ポルルが最後にいいました。
ミミは、誕生日が今からとても楽しみになりました。

翌朝、ミミは誕生日の準備に大忙しです。
部屋をきれいな花で飾り、テーブルにケーキを並べました。
ジュースやおかしを用意して仲間がくるのを待ちます。
しかし、約束の時間が過ぎても森の仲間は誰も訪れません。
待っても、待っても、誰も来ないのです。
「どうしたのだろう」
心配になったミミは急いで森の仲間の所にいきました。
するとみんな笑いながらこういいました。
「エープリール・フールの嘘にはひっかからないよ」
そうです、ミミの誕生日は4月2日。
みんなは4月1日に話したミミの話を、エープリール・フールの嘘と思ったのです。
信じてもらえなかった誕生日を考えると、ミミはとても悲しくなりました。
日が落ち暗くなっても、ミミは火のともされないケーキのローソク

を眺めていました。

「ミミおそくなってごめん」

突然の声にミミが振り向くと、そこにはポルルが立っていました。

「四葉のクローバーがどうしても見つからなくて」

ポルルはそういうと、玄関にみんなの靴がないことに気がつきました。

「みんな帰ったの？　遅れてごめんね」

あやまるポルルの手に握られた四葉のクローバーを見て、ミミはいいました。

「来てくれて本当にありがとう」

＞i２６０８３｜３３７８＜

銀のうろこ

きつねのヤンには、お父さんがいません。

たぬきのチッチ、トラのポルル、森の仲間みんなにお父さんがいます。

「おかあさん、どうしてぼくにはおとうさんいないの？」

ヤンがいくらたずねても、母親は悲しい顔をするばかりです。

そのうちヤンは、聞いてはいけないことだと思うようになりました。

森の奥深くに滝があり、そこに竜のヌシがすんでいました。

ヌシは、森のことならどんなことでも知っていました。

きつねのヤンは、ヌシにお父さんのことを聞いてみようと思いました。

ヤンは、滝までの遠い道のりをひとりであるいていきました。

ヤンがやっとたどりついた頃には、お日様は西にかたむきかけていました。

「ヌシさん、どうかおとうさんのことを教えてください」

ヤンが叫ぶと、滝の中からとても大きな銀色の竜が現れました。

「おまえはきつねのヤンだね」

ヤンは自分の名前を知っているヌシにおどろきました。

「遠くからきたお前に教えてあげよう。父親は、火事で子供を助けようとして亡くなった」

ヌシはとても悲しい目をしていいました。

「とても勇気のある男だった……」

父親に会えると思っていたヤンの目から、一粒なみだがこぼれました。

「泣くことはない、いいものをあげよう」

ヌシは、そう言うと体から銀のうろこをとり、小さく砕いたかけらをヤンに渡しました。

「おとうさんのこと教えてくれてありがとう」

ヤンは、ヌシにお礼をいってポケットに銀のうろこをしまいました。

ヤンは急いでお家に帰ろうとしましたが、夜になり、森の道は真っ暗でなにも見えません。

月も星も見えない森の中で、心細くなったヤンは、その場に座りこ

んでしまいました。

一日中歩き、とても疲れていたヤンは、そのまま眠ってしまいました。

眠ったヤンは夢を見ました。

夢の中でヤンは、大きな背中におんぶされ、空を飛んでいました。

ポケットの中の銀のうろこが、青白く光りあたりを照らしてくれます。

お家のベッドまであっという間にヤンを運んでくれました。

朝、目覚めたヤンは、銀のうろこをさがしました。

しかし、ポケットにも、どこにも、銀のうろこはありません。

「やっぱり夢だったのかな?」

ヤンが、がっかりして下をむくと、首にかかった銀のロケットペンダントが見えました。

不思議に思ってロケットを開いてみると、中に写真が入っていました。

写真には、赤ん坊のヤンを大切に抱いている、父親きつねの姿が写っていました。

初めて父親の姿を見た、ヤンはいいました。

「おとうさん、さみしくなんかないよ。これからは、いつも一緒だから……」

銀のロケットを静かに閉じると、ヤンは元気に母親の所にかけだしました。

＞i26341－33378＜

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9944t/

童話：森の仲間たち

2011年11月16日16時53分発行